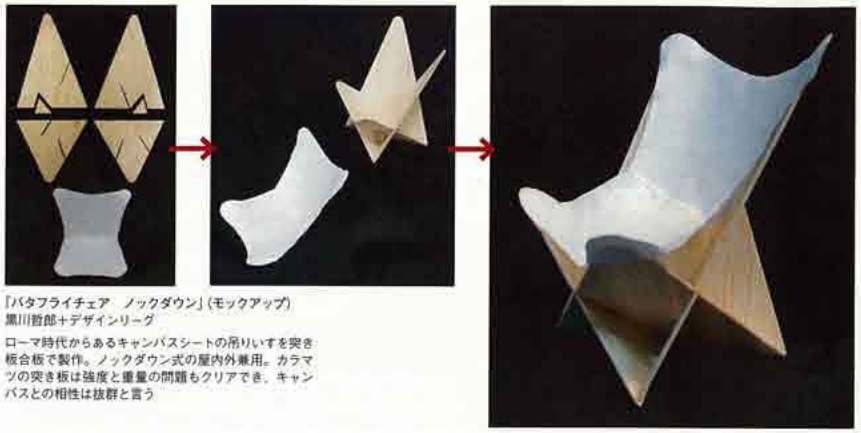
TOPICS 03

広い分野のクリエーターがカラマツの良さを引き出す

山口亘 ／ライター



「バタフライチェア　ノックダウン」（モックアップ）
黒川哲郎＋デザインリーグ
ローマ時代からあるキャンバスシートの吊りいすを突き板合板で製作。ノックダウン式の屋内外兼用。カラマツの突き板は強度と重量の問題もクリアでき、キャンバスとの相性は抜群と言う

硬いが、ねじれ、割れる。赤い木肌の木目は美しいが、樹脂が染み出る。カラマツはそんなイメージが強く、広く使われることのない木材だ。そのカラマツを使った「木のデザイン」招待作家展が9月25日から11月24日まで、長野県軽井沢にある脇田美術館で開催される。

「木のデザイン」プロジェクト自体は来年からスタートする公募展だが、そのプレビューとして開催されるのが、9月25日からの一線級のクリエーターによる招待作家展だ。この招待作家展では、2つの注目すべき点がある。1つは一般的に屋外材としての耐候性にしか利点を見いだされないカラマツを使用するという点だ。加えて、難易度の高い材料に対し、参加するクリエーターが、通常では木材に縁のない広い分野にまでわたっていることだ。

カラマツの利用については、カラマツの一大産地でこのプロジェクトに協力する長野県なりの狙いがある。乾燥技術の進歩で欠点を克服しつつある県産のカラマツ材のアピールと、その良さの認知だ。では、木材に縁遠い分野に及ぶ人選の狙いは何か。

参加クリエーターの1人でディレクションも手がけるのは、大スパンの木造建築で知られる建築家、黒川哲郎・東京芸術大学教授だ。「展覧会には地域資源の活用という大きな狙いがある。そのため、対象が狭いジャンルになりがちな製品化という方向は重視せず、むしろカラマツの意外な利用方の提案を期待して、広い分野、習熟度の違う人たちを選んだ」と黒川氏は人選の狙いを説明する。

日本はいま、森林の持続的利用法の再整備を急いでいる。間伐は健全な木の育成のため、樹齢20年でされるべきだが、多くの森林は需要の激減で40年余を手付かずで経過してしまっている。間伐の有効性は樹齢60年。残された時間は非常に少ない。もはや資源活用をうたうには、量の視点が欠かせない。

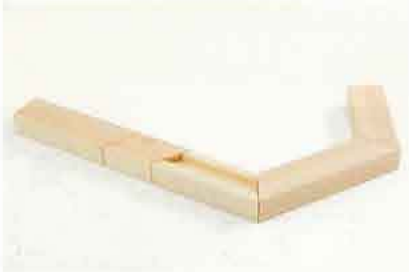
参加するのは、横浜ベイブリッジなど大型橋梁のデザインを手がける大野美代子氏をはじめ、剣持デザイン研究所、軽井沢大賀ホールの内装を手がけたデザイナー石田和人氏、そして、日本画家の手塚雄二・東京芸術大学教授ら、総勢20人を超える。

参加するデザイナーの石田和人氏はカラマツについて、「木のエネルギーを感じる」と言う。出品作はデザイナーとしてクラフトとは別方向の既製材利用にこだわった。加工材から元の1本の木への還元を意識した一直線の腰掛けが、複数のパーツとなって曲がり、裏返り、場を自由に形成する提案だ。

大野美代子氏の出品作は、橋の構造を利用した2人がけベンチだ。「橋に腰掛けるガリバーという、子供のころから持っていたイメージ」から制作されており、氏にとってゼネコンとの巨大プロジェクトとはだいぶ方向の違う仕事となったようだ。以前、カラマツの家具を手がけたことのある大野氏は、その特性から、むしろ精度を要求される家具とは違うアプローチに可能性を見ている。木の表情を生かした小型の橋や、大量需要が見込める道路設置の遮音壁のアイデアなどもあると言う。

「木のデザイン」招待作家展はデザイン、アート、建築といった広い分野のクリエーターが参加することで、広い視野と可能性を提示してくれるであろう。森林資源活用の視点で見ると、従来のコンペのように製品化による製造業を活性化する役割を担いつつ、大量需要を模索する行政に対し、公共財や公共構造物をクリエーター側から働きかけができる場ともなる可能性を持つ。

一般公募となる来年はより多くの提案が寄せられるであろうが、この広い分野による視点を維持できるかが鍵となりそうだ。本展の船出に注目したい。

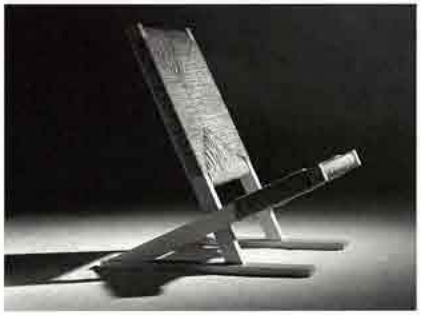


「折柱-ORIBASHIRA-」（モックアップ）　石田和人
あえて工業製品の面材で製作することで、カラマツの流通を活性化できればとの思いを込めた。大小さまざまなパーツは、ベンチや卓、裏返すことでラックへと用途を変え、場を作りだす

「ガリバーのイス」（イメージ）　大野美代子
橋の構造を利用したベンチ

（写真：藤塚光政）

「無題」　剣持デザイン研究所



「ガマ椅子」　松村勝男　1972年
故・松村勝男氏が長野・松本の城北木材加工と「脱脂カラマツ」の有効利用に取り組んだ末に誕生した

『NIKKEI DESIGN』 2010年10月号（9月24日発売）　発行　日経BP社